

「やもめの息子を生き返らせる」

2023年03月17日

イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、担ぎ出されるところであった。母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止った。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、その死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子を母親にお渡しになった。(ルカ7:12~15)

主イエスはカファルナウムからナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒について来た。町の門に近づかれると、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところであった。母親はやもめで、一人息子を失い、悲しみのどん底にあった。町の人々は母親に同情し、傍に付き添って慰めようと、共に歩いていた。主イエスは、母親を見て、憐れに思い、「もう、泣かなくてもよい」と言われた。そして、棺に近づき触れられると、担いでいた人たちは立ち止った。主イエスが、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われると、その死人は起き上がり、ものを言い始めた。主イエスは息子を母親にお渡しになった。母親は驚きの中、死んだ息子が生き返ったと、どれほど喜んだであろうか。著者ルカは、主イエスの言葉が死者を生者に引き戻したと伝えている。

その場にいた群衆は皆、恐れを抱き、「偉大な預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を顧みてくださった」言って、神を崇めた。主イエスのなされたこの出来事は、ユダヤ全土と周りの地方一帯に広まった。

この奇跡物語は、預言者エリヤの列王記上17章に記された故事を原型としている。エリヤは、異教のシドンのサレプタで、貧しいやもめと息子に出会い、尽きない小麦粉となくならない油を与える奇跡を行った。ところが、息子が亡くなった。エリヤは、「わが神、主よ、どうかこの子の命を元に戻してください」と祈ると、聞き入れられ、息子は生き返った。また、預言者エリシャに関し、列王記下4章で、下記の故事を伝えている。エリシャは、死んで、寝台に横たわる子どもと、二人きりになって祈った。子どもの上に身を伏せ、口と口、目と目を合わせ、手を重ねてかがみ込むと、体は暖かくなり、寝台から起き上がった。旧約聖書には、このように死者の蘇りが記されている。

著者ルカは、エリヤ、エリシャの故事をベースにしているのだろうが、それ以上のメッセージを込めている。主イエスは、十字架の死から復活させられてキリストであるとの信仰に立って、死を命へと蘇らせる方であると伝えている。

死んだ者が生き返ることはあり得ない。ところが、死者の生き返りを書いているので、これは死んだのではなく、気を失っているのを目覚めさせたと理解するという人もいる。確かに、死の判定が厳密でなかったとも考えられる。しかし、聖書記者たちは、失神からの目覚めとは捉えていない。彼らは、死を命に変える神を信じ、キリストは神の命を持っておられるという信仰告白として、一人息子の復活を記述したのである。

ヨハネ黙示録3章1節dに「あなたが生きていたとは名ばかりで、実は死んでいる」と書かれている。この事実は私どもの現実ではないか。心と魂は死んでしまい、無残な屍を晒している。その屍を生き返らせてくださったキリストの恵みをいただいたことが、福音を知ること、福音に生かされることである。